

Minato-branch

No.8

【支部長】(株)ケイ・エム・アイ・ネットワーク
 【副支部長】(株)東京技術協会
 【副支部長】(株)キンコー

増田 光 仁
 鈴木 将 人
 及 川 聡

【副支部長】(株)プランニングマーケット
 【副支部長】(株)創土社
 【支部監査】(株)アイワエンタープライズ

福田 久 美 子
 宮 地 本 治
 八 田 幸

死亡 15,721人 行方不明 4,615人 計 20,444人(2011/8)
 と、一年前に支部報で被災者の皆様に対しお悔やみを申しあげました。
 しかしこの未曾有の複合大災害となった東日本大震災は、一年を経過した今もお復旧・復興も十分に進んでいないようです。
 死亡 15,857人 行方不明 3,059人 計18,916人(2012/3)
 その中でも約1万9千余の被害者数に、自然災害の恐ろしさとその脅威に無力感を改めて感じています。
 しかし、これは自然との折り合いを忘れた近代文明に対する自然からの警告とも言われています。
 私たちは今一度先人が残した自然への畏敬と恵みに対する感謝に、学び直しをしなければならないようです。
 3.11以後余震が7000回を超え、地殻変動も活発化しM5以上の強い余震が599回も多発している事に改めて注目しておきたいと思えます。
 とりわけ、帰宅困難者が都内で352万人も発生したことから、
 都の防災計画が見直され、被災現場からの勝手な移動をしないように求められています。
 特に首都直下型地震が「4年以内に70%」の確率でM7クラスが発生すると言われ、特に東京湾北部地震での想定では、
 震度M7クラスで木造家屋の全壊が39万棟、
 同死者が想定で1万人余と増加訂正され、改めて私たちは企業と社員の安全・安心への取組を急がなければなりません。
 今「本当に首都はもつのか」「経済の混乱を回避するには如何に」「本社機能・データの分散を急げ!」と
 関係者の間で具体的な取組が始まっています。
 私たち港区の事業者として「地域防災」をベースに「防災・減災」
 「要支援者の調査や安否確認の手段の確保と防災隣組の構築」等の取組が始まりました。
 「事業継続こそ最大の地域貢献」を合い言葉にして、
 ややもすると風化しつつある災害対応について事業継続計画(BCP)の策定を急ぎたいと考えています。
 最後に原発事故は、その対応も意見の分かれるところですが、
 「40年間高められてきた依存度や、その運用に伴う不明朗さに対して深められた不安」は、
 原発の再開・廃止の判断を難しくしているようです。私たちの事業と生活に関わる無駄と効率化をもう一度見直し
 我が国のエネルギー政策に建設的意見具申が出来るよう会員の皆様と大いに意見交換をして参りたいと考えています。

支部長 業界 日誌

◆東グラ創立時支部として、港支部も創立50周年を迎える事となりました。今号は、編集者の独断編集とのお叱り覚悟でそれに関わる記事を纏めてみました。中でも白石元支部長の転載原稿は若手の皆様には参考になるのではないのでしょうか。

◆忘年会報告は、次ページの写真集でお汲みおき頂きたいと思えます。

◆東グラCSR自主研究会は、東グラ予算総会に併せて報告会を行いました。同会には当支部より、三進社、東京技術協会、創土社の三社にご参加頂きました。本取組は先進的取組としてお陰様で皆様に好評を頂きました。三社のご協力に感謝申し上げます。

◆指導部への若手登用! 今回創土社の宮地氏に副支部長をお引き受け頂きました。久しぶりの若手の登用と勝手ながら目論みの成功に先ずは安堵しています。さあ次は誰に声

を掛けようかな! 自薦他薦歓迎!

◆喜びついでに、前支部長の斎藤秀勝氏がフェイス代表に就任しました。暫く支部の次世代活動が停滞していた事もあり、本部・支部のフェイスの活躍に期待をしたいと思います。

◆産団連報告 今回も産団連ニュースからの転載記事を入れております。私たちの地域貢献を模索しながら、私たち中小事業者と行政並びに地域住民との新たな関係構築を図りたいと考えています。東グラの公益法人取得が追い風となる事を期待して、本部事業にも貢献出来る事を願っています。
 東印工組は、今年度からCSRを本部事業として取組まれるようです。同組港支部とタイアップしながら産団連事業に取組みたいと考えています。

◆白石氏の計報! 今回支部50周年を機会に資料整理をしていた折に、改めて白石元支

部長の在籍21年間のご苦勞に感謝しておりました。そんな中、白石氏の計報が入りました。小山、白井、吉田氏と支部の第一世代が文字通り引退をされています。第二世代に改めてバトンの引き継ぎをお願いする次第です。

◆感謝! 私事で恐縮ですが、私が白石さんから副支部長を依頼されてから20余年が過ぎました。白石さんには港だけでなくそのお願の広さから東グラの皆さんへの顔つなぎをして頂きました。今回東グラ50周年記念式典で東京都産業労働局長賞を頂きました。関係者の皆様に改めて感謝いたします。

◆三井生命保険(株)の関係者の方が事務所周りをされている事と思えます。お忙しいところ恐縮ですが、よろしくご検討の程お願い致します(今回の地域防災への取り組についても同社とのタイアップ事業を模索中です)。

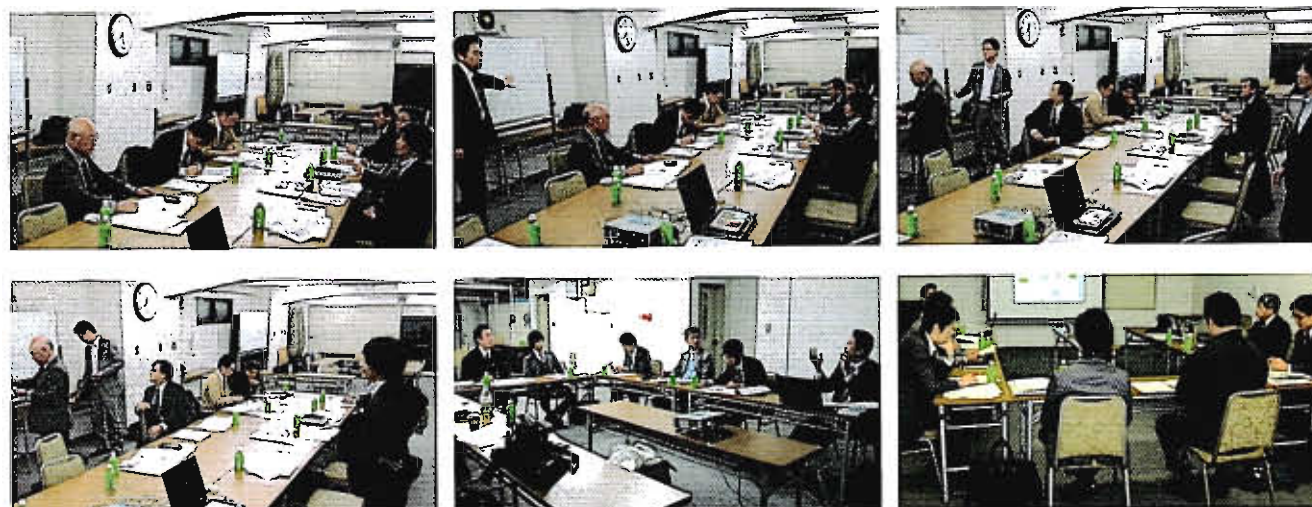
◎ 支店31周年会 於・芝パークホテル (23.12.9)

★恒3,11後9カ月 厳しい年も師走を迎え、会員相互の親睦と情報交換の場として楽しく過ごす事が出来ました。恒例のビンゴゲームでの景品も出席者に漏れの無いように配慮しました。



◎ 23年度「東京グラフィックスCSR自主研究会」

★2カ月間隔で年6回の研究会を行いました。研究報告書がお手元に届きましたらお目通し下さい。



◎ 東商主催防災視察会 (24.2.20)

★国交省関東地方整備局荒川下流河川事務所 水門河川防災センター見学 増田、吉野 2名参加



◎ 東グラ50周年式典・新年会 於・構山層 (24.1.17)

★式典では、50年協力会員3社(港支部)とKMIネット(増田)に対し会長並びに都産業労働局長賞が表彰されました。懇親会での支部関係者のスナップを纏めました(P6産団連ニュース参照)。



◎「東京グラフィックスCSP研究会 報告会並びに東グラ予算総会」於・芝パークホテル (24.3.28)

★講演会は前神奈川県知事松沢氏にお願いしました。懇親会は港支部が主催した為、運営について支部関係者に協力を頂きました。また、前支部長の斎藤秀勝氏がフェイス代表(理事)に就任されました。



Facebook仕事で使ってますか? セミナー開催

2012年2月15日(水)18時より、ニッケイビル8F会議室において「明日の可能性を探るセミナー⑦～Facebook仕事で使ってますか?」が、港支部と本部教育委員会の共催で(株)エスクリエイトの石川雅章社長を講師に迎えて開催されました。

これは、このセミナーに先立って昨年10月に開催された「Facebook使ってますか?」セミナーが大好評を博し「今度はFacebookを集客やマーケティングに活用する方法を知りたい」との声が多かったため第2弾として企画されたものです。

ここで「ところでFacebookってなに?」という方のために簡単に説明しますと、Facebook(フェイスブック)はmixi(ミクシイ)、Twitter(ツイッター)などと並ぶSNS(ソーシャルネットワークサービス)の一つです。誰でも無料で使え、多くの人と情報共有や情報交換ができます。PCはもちろん、携帯電話やスマートフォンでも使えます。

一時期ブログと呼ばれるインターネット上の日記が大流行しましたが、それを「ネット上のコミュニケーションツール」という機能を強化し様々な方向に展開したのがSNSと言えるでしょう。それぞれ特徴がありますが、中でもFacebookは「実名」「写真」「プロフィール」を登録することになっているのが最大の特徴です。

たとえば、mixiやTwitterは匿名で一人の人間がいくつもの名前を使えますので、ネガティブな発言やなりすましなどが気軽にできてしまいます。それに比べてFacebookは個人が容易に特定できるため、社会的信用を失うような発言や行為はできないというわけです。

世界中に8億人のユーザーを持つ、一つの国家とまでいわれる世界最大のSNS・Facebookですが、恥ずかしがり屋な日本人には向かないと言われ、事実最近まではユーザー数もあまり多くありませんでした。ところがこのところ実際の人間関係を元にして友人を広げていく使い方を中心にユーザー数が急増しており、それに比例して注目度もうなぎ登り。Facebook関連の書籍が多数出版され、ついには創設者マーク・ザッカーバーグを描いた映画「ソーシャル・ネットワーク」が公開されるに至りました。日本のユーザー数は2011年9月末時点でついに1000万人を超えたそうです。

実際に東京グラフィックスの中にもFacebookユーザーはどんどん増えてきており、たぶんもう数十人はいるのではないのでしょうか。前回のセミナーでもFacebookユーザーがたくさん来場されましたが、今回はFacebook上で「イベント」としてこのセミナーを登録し参加を募るという方法をとったところ、なんと参加者が40名に達し座席を確保するため急遽机を撤去したほどです。

セミナー内容は、前回受講されなかった方のためにもまずおさらいとしてSNSとは何か?Facebookとはどんなサービスなのか?から始まりました。先述した「実名登録」の他に、最近では多くのSNSで使われるようになった「いいね!」ボタンと「コメント」「シェア」機能を上手に使うことでコミュニケーションをとることが基本ということでした。

その他、第一印象が大事なので仕事に活用したければ自分の写真はできればプロに撮ってもらう、なるべく毎日決まった時間、できれば朝一番に投稿する、自分から積極的に友達を増やす、パーティーなどを企画し「イベント」機能を活用することなどが人脈を広げ仕事にもつながってくる、というお話でした。

次に、個人ページが充実してきたら「Facebookページ」と呼ばれる企業ページをつくることをお勧めされ、実際に長太郎飯店さんという中華料理店がFacebookを活用して手作り肉まんの拡販に成功した事例が紹介されました。Facebookアカウントを持っていらっしゃる方はぜひ「長太郎飯店」で検索してみてください。

さらに、これからはインターネット動画が主流になってくるということで、インターネットテレビと組み合わせたマーケティングの事例として静岡の清水にある居酒屋「こさむ」さんの事例が紹介されました。まずFacebookで新メニューを作ってファンを作り、来店してもらって感想を広めてもらい、さらにネット動画でも紹介して顧客拡大につなげる、という手法です。動画は石川先生が運営している「SIZONTV」というインターネットテレビ局で見れますのでぜひ「SIZONTV」で検索してみてください。



講師 石川氏

他にもいろいろな事例や活用法が紹介され、2時間という時間があったという間の中身の濃いセミナーで、参加者アンケートでもたいへん好評でした。石川先生がモトヤ出身で現在のエスクリエイトもお父様から継いだ印刷会社ということで、印刷受注を増やすマーケティングの実例としてもたいへん参考になりました。

終了後は石川先生を招いての恒例の懇親会が開催されましたが、こちらもなんと参加者26名という空前の規模となり、セミナー懇親会が初めてという方も多く参加者同士の情報交換に花が咲きました。

港支部としても主催セミナーが大好評で黒字決算という面目躍如を果たしました。ご協力、ご参加いただいた支部の皆様どうもありがとうございました。

〈報告者 鈴木将人〉

東京グラフィックス港支部新年会

私たち東京グラフィックス港支部は、ここ数年(社)東京グラフィックス傘下の10支部と共同で新年会・賀詞交歓会を実施しています。

本年は、特に業界創立50周年に当たるため、1月17日に「創立50周年記念懇親会 兼 2012年 新春賀詞交換会」として、会場を文京区・椿山荘にて300余名が参加して開催されました。

なお、賀詞交歓会に先立ち開催された記念式典に於いて各種表彰式が行なわれ、我が港支部より50年継続企業として会長より(株)アイワエンタープライズ(八田幸社長)、(株)キンコー(及川聡社長)、(株)三州社(宮木宏社長)の3社と業界事業貢献として主管の東京都産業労働局長より(株)ケイ・エム・アイネ

ットワーク(増田光仁社長)がそれぞれ感謝状を贈呈されました。

昨年の3.11東日本大震災より10カ月が過ぎた中での新年会は、新生日本の為に我々中小事業者の社会的責任の確認と被災者・地域の再建・再興への支援を今一度再確認いたしました。

会員各位の持続する事業継承と個々の会員の事業の安定化の為に改めて団体の存在意義が問われるとともに、5年後10年後の明るい未来展望を求めて業界の団結を改めて確認する会合となりました。

平成24年2月6日

東京グラフィックス港支部長

(株)ケイ・エム・アイネットワーク 増田光仁

(産団連ニュースより)

《50周年記念支部記念グッズ完成》

「文庫本サイズ・ブックカバー」

昨年より支部創立50周年を記念し、支部として記念行事等について検討をして参りました。正副支部長会議や昨年の総会時等において広く(?)皆様にご意見を伺い集約を行って参りました。

巷間電子ブック・書籍が、我が業界を含め喧しく話題を独占しているようですが、ここに我が港支部は、現在並びに未来に亘り「紙本」を小脇に抱えてその永続制を願って「文庫本サイズ・ブックカバー」をお届けする事になりました。

未長いご愛顧を頂ければ幸いです。

なお、1社2枚の配布予定ですが、各社の行事等にご活用頂く場合も考え今回若干多めに作成しています。改めてお知らせの予定ですが支部活性化の一助としてご検討をお願い出来ればと考えています。

最後に、本件につきましては鈴木副支部長を責任者として意見の集約と交渉事をお願いしました。ここに会員の皆様にお届けするに当たり改めて関係者の皆様にお礼申し上げます。

港支部報の歴史

白石 勲 (憐文生社社長)

昭和42年 8月に創刊号

先日、増田副支部長から電話があり、支部報の原稿依頼がありました。私の近況報告でもといわれましたが、特別文章にするほどのこともないので、会合の都度話題になる「港支部報」の歴史を書いて皆様へ参考になればと筆を取りました。ただし、私の記憶の範囲です。皆様のご理解を頂ければと思っております。

昭和42年8月に、創刊号が出来ました。(支部長 憐三青社社長 佐藤輝治氏) B5両面活版タイプ印刷。文中の新入会員を見ますと、丸星憐 社長 一木茂雄氏。(尙浜田印書室社長 浜田有希恵氏のお名前がありました。浜田さんは30年前に入会されておられ、昨年4月に再入会されているので懐かしかったです。

その後支部報はしばらく休刊。昭和45年2月復刊No.1が発行されました。B4判謄写印刷。(支部長 尙ファイル印刷社長 浅野弘氏) 翌3月に復刊No.2が発行されております。

No.3～5までは不明(私が所有していません)。昭和46年5月No.6発行。官製はがき支部会延期の通知(支部長 憐へいわ印刷社長 清水俊雄氏)。

初代編集担当は臼井幸男氏

No.7は、B5判1頁で、支部総会通知(支部長清水氏)昭和46年6月発行。昭和46年6月9日麻布グリーン会館にて開催された港支部総会は、出席者全員の承認で無事終了しておりますが、欠員役員の補充で憐文生社白石、憐十印佐藤の2名が役員に任命されております。私にとって、この時の役員就任が、5年後の支部長への道に継がるとは思っても

いませんでした。

又この時、清水支部長より今年度から専任の支部担当を決め定期的に発行したい旨の提案がありました。全員賛成の拍手。そして、名誉ある初代編集担当者として憐ハイビジネス臼井社長が選任されております。



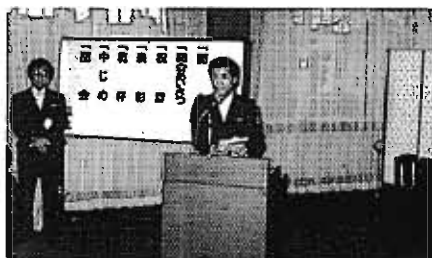
初代編集担当者の臼井さんのことで思い出されることは、支部会はもとより会合には必ず録音機を持参し、その日の議題を録音しておき、後日そのテープから原稿を作り、制作、発送まで全部ご自分でやり抜かれたことです。

(No.8の再復刊からNo.33まで発行)丸4年半、本当にご苦労様でした。会社の仕事に大変支障があったことと思いますが、熱心な仕事振りには感服いたしました。(平均年6回発行)その後憐ユニオン 山下社長に引き継がれ、山下さんも臼井さんに負けぬ位、熱心に担当され、昭和51年3月～昭和53年1月までNo.34～No.43 約1年10カ月頑張っていたきました。(年平均5回)

山下正直氏も頑張る

山下さんが支部報を担当していた時、支部長の変更がありました。それは、港支部にとって記念すべきこととなりましたが、本支部より東軽工会長が推挙されることになりました。そして、憐アイワ印刷の八田氏が東軽工会長に就任されることになり、その関連人事として会長候補の要請で、清水支部長が副会長兼総務部長として推選されることになりました。そこで問題になりますのが、後任支部長問題です。数回に亘る支部長推選委員会がもたれましたが、役員全員逃げの一手。

◎ 港支部20周年祝賀会 (24.3.29)



最後まで私も逃げていたのですが、清水さんから浜松町の赤提灯へ呼び出され、延々と一時間半にわたり後任支部長の要請を受けるはめになりました。もうきりがなから帰りますと席を立とうとした時、清水支部長より「白石さんがだめなら副支部長と支部長を兼任でやるしかない……。」との一言がありました。私はこの一言に負けました。

それから、結果として21年の苦しみが始まりました（脱線して申し分けない。）

支部報の歴史に話を戻しますが、最初の支部長2年間は、山下さんが引き続き頑張っていて全部やって下さったので年2～3回の挨拶文を書くだけで済みました。

昭和53年1月25日発行No.43で山下さんから木村輝国さんへバトンタッチされました。発

行年譜を見ますとこのあたりから少々おかしくなり発行が遅れ出しました。

そして編集担当制が崩れ支部長が全原稿を書くようになってしまったのもこのあたりからでした。そして、約15年間原稿書いて来ましたが、最初の4年間は年2回発行できましたが、その後年1回となり、平成6年3月15日発行No.63で力つきてしまいました。申しわけありません。

いずれにしても、この原稿が新しく副支部長による新発行体制第一号としてお渡し出来ることを大変喜ばしく思います。

支部の歴史としても、地道ではありますが基本的支部活動の一環として継続発行を切に願っております。

(支部報No64号より)

私達の業界団体「東京グラフィックス」の健全な運営は、全国組織である「ジャクラ」の組織運営の根源であります。

全国総数の30%を擁する「東京グラフィックス」は全国組織の牽引役です。また、この「東京グラフィックス」を支えている、都内10支部は、全ての「原点」なのです。

「港支部の10年を顧みる」に最もな話題とすれば、白石さんが、支部長「21年」の長期政権を継続してきたことです。業界環境も、平成元年を頂点に右肩の上があった業界の最盛期でもありました。

白石さんの「イエス」に甘え、そのまま支部長を押し付けてきたという港支部会員の「無責任さ」の反動を身を持って感じる昨今です。

勿論、白石さんも真面目な方ですから、ご自分の責任は、職務は、ひたすらに務められましたので、大きなめめ事はなく、常に平和な支部でした。

私達の業界団体は、「会員が、皆が、平和で和気あいあいと仲良く」というのが、このまま継続できたら、その運営の目的のひとつとしても理想的なのかも知れません。

しかし、当時、現今の私達が遭遇している環境について「誰が」「何を」「どの位」の変化を予測したでしょうか。これは、ひとつ印刷業界の中で、支部運営を取り上げてみても、支部長が替わらない、運営方針がマンネリ化、そして、その「反動」とは、気が付いてみたら、支部活動としての「若手」が全く育っていなかったのです。

IT化、デジタル化の進展は止まるところを知らず、業界の将来を決定づけ、そして企業の存続を左右すること



は周知の通りで、実際にはこの分野を制覇しているのは、この「若手」なのです。この人達を業界の中心に、先頭に引き出さなければなりません。

支部の活性化は、「業界運営、業界の発展」において全ての原点と主張してきました。そして、その「原点」とは「若手」を育てることであると信じ、ほぼ休眠状態にある「港支部次世代の会」の復活運営を成し遂げたいと思います。

(支部長 椎名敏男)

港支部には「三つのスローガン」があります。

- 「活気ある港支部にしよう！」
 - ・元気に前向き志向で営業しよう。
- 「皆で大いに勉強しよう！」
 - ・新しい業界情報を得よう。
- 「皆で親しく交流しよう！」
 - ・仲間から元気と情報を得よう。

(東グラ40周年記念誌より)

..... 港支部創立50年を迎えて!

1) 支部創立50年

この度東京グラフィックスサービス工業会が創立50周年を迎える事となりましたが、港支部も創立時支部としてお陰様でここに支部創立50周年を迎える事が出来ました。

関係者の皆様改めてお礼申し上げます。

今回、本部記念行事の一環として記念誌の作成が決まり、併せて各支部の直近の活動報告をさせて頂く事となりました。

以下、直近の報告に当たり、そのキーワードとして支部報と支部班別会員名簿を取り上げてご報告します。

2) 支部報と支部班別会員名簿に見る支部の現況と将来展望!

報告に入る前に、簡単に支部50周年を振り返っておこうと思いますが、今手元に元支部長の白石勳氏が、支部報64号(H10.9)に「港支部報の歴史」として寄稿されたものがありますので、抜粋紹介させて頂きながら支部の課題と未来を探って行きたいと思えます。

港支部報は「昭和42年8月に創刊号が出来ました(支部長=(株)三青社社長 佐藤輝治氏。B5両面孔版印刷)」。

港支部会員・支部報年表

平成24年3月

年度	会員	支部長	支部報No	副支部長
S62年	74	白石	55,56号	木村(輝)
S63年		白石	57,58号	中田、木村(直)、吉田、松木
H元年6月	77	白石	59,60,61号	中田、木村(直)、吉田、松木、増田
H元年9月	80	白石		
H元年10月	82	白石		
H2年6月	83	白石	62号	
H3年6月	85	白石		
H4年4月	79	白石		
H5年4月	79	白石		中田、木村(直)、吉田、椎名、増田
H6年4月		白石		
H7年4月		白石	63号	【中田副支部長没】
H8年4月		白石	〈白石氏支部長在任21年〉	
H9年4月		吉田	64号	木村、椎名、増田、八田、
H10年4月	75	吉田		
H11年4月		吉田	65号	梁瀬
H12年4月		吉田	66号	山根
H13年4月		椎名	67,68号	木村、増田、八田、大友
H14年4月		椎名	69,70号	
H15年4月	59	椎名/増田	71,72号	
H16年4月		増田	73号	小山
H17年4月		及川	74号	大友、増田、齋藤
H18年4月	31	及川	75号	
H19年4月	31	齋藤/増田	76,77号	鈴木、及川、福田
H20年4月	31	増田	78,79号	大友、及川、鈴木、福田
H21年4月		増田	80,81号	
H22年4月		増田	82,83号	
H23年4月	28	増田	84,85号	及川、鈴木、福田、宮地

その後支部報はしばらく休刊し、昭和45年2月復刊No.1を発行「B4判謄写印刷(支部長=(有)ファイル印刷社長 浅野弘氏)。引き続き翌月復刊No.2が発行されました。(No.3・5号不明)昭和46年5月No.6発行。官製はがきで部会延期の通知(支部長=(株)へいわ印刷社長 清水俊雄氏)。No.7は、B5判1頁で、支部総会通知(支部長=清水氏)を昭和46年6月発行」。以後支部長の意向を受け定期発行体制を構築。初代編集担当を(株)ハイビジネス社長の白井氏に委嘱。

初代編集担当の白井さんには、「支部会はもとより合会には必ず録音機を持参し、その日の議題を録音しておき、後日そのテープから原稿を作り、制作、発送まで全部ご自分でやり抜かれ、No.8の再復刊からNo.33まで約4年半、関わって頂きました。(平均年6回発行)」。

その後編集担当は「(株)ユニオン 山下社長に引き継がれ、昭和51年3月～53年1月までNo.34～No.43 約1年10か月 年平均5回と頑張って頂きました」。

このとき、「港支部にとって記念すべき事として、本支部より東軽工会長が推挙されることになり、(株)アイワ印刷(現・アイワエンタープライズ)の八田剛氏が東軽工会長に就任。清水支部長が会長候補要請で副会長兼総務部長を受託し、港支部出身の八田体制(4期4年)が敷かれる事になりました。

支部としては、後任支部長として紆余曲折をへた結果、「結果として21年の苦しみの始まり」と回顧されておられる、白石支部長(S41・H8)の誕生となりました。

その後編集担当者は山下氏から木村(輝)氏と引き継がれましたが、発行年譜から見ると少々体制の崩れが生じ「支部長が全原稿を書くようになってしまったのもこの辺りで、約15年間原稿を書きながらの発行となり、最初の4年間は年2回発行が出来ました、その後は年1回とな、平成

6年3月15日発行No.63で力つきました」。

これ以後の経過は、白石氏から支部長を引継がれた吉田氏並びに椎名、及川、斎藤、増田の各支部長(14年間)のもとで、さらにNo85まで号を重ねて現在に至っています。

さてここで、もう一つのキーワードとしての支部別会員名簿を見てみたいと思います(前頁参照)。

本資料は、主に白石支部長時代に支部報とともに作成されており(現在は休刊)、平成4年4月号によると、班別制をとり7班84社の支部構成となっています。添付資料をご覧頂けるとお分かりのように、支部報の発行より密に制作されています。これは、文字通り64年の東京オリンピックを挟んで、当港支部も好景気の中で平成4年の84社をピークに平成10年までは、時には毎月、そして年間数社の新入会員をお迎えして会員数70代を維持してきました。

しかしながら、その後の5年間・平成15年5月は59社(16社減)。更に5年後の平成20年には31社(28社減)となり、現在28社となっています。

会員の減少等につきましては、「鉄筆一本、知恵と才覚で戦後を生き抜いて来られた先輩諸兄!」も、事業継承問題や事業縮小、本店・事業所の移転等に見るまでもなく、都市型中小企業とりわけ中小印刷事業者にとって事業継続を難しくしてきています。しかしながら現在港支部は、都市における中小事業者の地域貢献と都市防災をキーワードに地域に密着した新規事業の創造を目的に、行政と区内中小事業者並びに住民による新たな事業創出を行おうとしています。会員増強は、これらの運動を通して達成したいと考えています。

(東グラ50周年記念誌より)



東京グラフィックスCSR自主研究会を終えて！

増田代表

《はじめに》

昨年3月10日、22年度決算総会に先立ち、「東京グラフィックスCSR自主研究会」の立ち上げとセミナーを開催し、実践的なCSR報告書作りが始まりました。

私達は、所属業界の社会的貢献と各個企業の新たな地域貢献について継続的にセミナー等を開催して来ました。また、CSR活動の取り組みと並行して、鳥インフルエンザ・パンデミック等の感染症対策として事業継続（BCP）の視点から対策セミナーを東京都の協力を頂き開催してきました。勿論CSR並びにBCPへの取り組みの背景には、迫り来ると言われている「首都直下型震災」への第一歩を踏み出すことにありました。

そして、翌日

《3月11日午後2時46分「東日本大震災」が発生！》

——岩手・宮城・福島の前災三県の死者・行方不明者は、1万九千余名

予想されていた首都直下型の災害ではありませんでしたが、震源を遠く離れた東京でも、当日325万人余の帰宅困難者が発生し、都内は終日その対応に追われました。また、私たちは災害に無防備とも言える実情も改めて思い知らされました。

《第一期自主研究会活動を終えて》

最初に、鳥インフルエンザ等のパンデミック対策として講師派遣を頂いた我が業界の主管官庁である東京都産業労働局商工部経営支援課に感謝申し上げます。また、今期の自主研究会の講師役をお引き受け頂いたキャノンマーケティングジャパン(株)に合わせ感謝を申し上げます。特にキャノンマーケティングジャパン(株)には、過去3年に亘り継続的にCSRセミナーを開催して頂きました。

今回こうして一年間の成果として、業界と協力3社のCSR報告書を皆様にお届けするにあたり、自主研究会員としてご協力を頂いた会員の皆様にも改めて感謝申し上げます。

平均2カ月間隔で研究会を開催しました。詳しくはキャノンマーケティングジャパンの早坂氏の報告をご覧頂くとして、基本的な理解の周知とセミナーでの演習を重視したものとして、改めて自社の成り立ちと将来への方針提示に思いを進める事が出来たように感じています。

今後、会員企業の皆様がこれに続きCSR報告書作成に取り組まれる事を願っています。

《次年度の課題（BCP策定に向けて）》

私たちは、今回の自主研究会のもう一つの重要なテーマとして「地域貢献の出来る中小印刷事業者」「地域密着型中小事業者の新規事業の開発・挑戦」を喫緊の課題としてきました。今期、CSR報告書の作成を通して課題と問題点の抽出を行ないましたので、第二期は新たな実践的な事業展開への報告が出来るよう頑張りたいと考えています。

今年度CSR研究会の第1回は、「準備すべきBCP(事業継続計画)のポイントとして実施しました。次年度は、自主研究会員はもとより所属組合員が「我が社のBCP」を持つ為の業界運動を開始したいと考えています。

現在予想される「首都直下型震災」は、震災で地殻変動が活発化し、M5以上の余震は599回を数えている事と併せより現実味を帯びて来ています。加えてM7クラスが「4年以内に70%」と言う大学の研究機関からの発表もあり、行政も首都防災計画を急ぎ見直しをしています。私達も「想定外」と言う言葉を使う事のないように、私達の「想定」する緊急時事業継続の対策を急ぎたいと考えます。

事前計画と緊急時における30分、3日間、3カ月の具体的施策を検証し、「事業継続こそ最大の社会貢献！」を合い言葉として、なにより事業責任者並びに管理責任者の不測の事態回避計画から実践的なBCP運動を開始したいと考えています。30分以内になすべきことと従業員並びにステークホルダーに対する3日間の命の保証と3カ月の事業継続を如何に可能とするかを各社の実情に併せ作成して行きたいと考えています。

最後に、今期の自主研究会への協力とご支援に改めて感謝致します。

私たちの地域貢献!

「地域防災 強化事業 推進委員会(地防委)」設立!

防災「隣組」=行政と地域住民との強力なトライアングルの構築

昨年11月10日に開催された理事会で「地域防災 強化事業 推進委員会(地防委)」一都市型中小企業集団の地域貢献と事業継続計画の確立一の設立が了承されました。

3.11東日本大震災からまもなく1年を迎えようとしています。

しかし、1年前に感じた多くの教訓を風化させない為に、私たちはその経験則を日常的に生かしていかなければならないと考えています。

その一つに、現在首都直下型震災に対する対応が急がれていますが、私たちは「地域防災」をキーワードとしてこれに備えたいと考えています。

- 1) 地域貢献企業として地域住民と協力
- 2) 防災「隣組」への取組の強化—行政と協力し良きステークホルダーとして活動
とりわけ昨年末に発表された東京都防災対応指針によると、首都直下型地震への備えとして、地域の連帯の再生による防災隣組の構築、帰宅困難者対策の再構築、住民、事業者等の防災力の向上等が喫緊の課題として提示されています。私達はこれにしっかりと答えて行きたいと考えています。産団連のささやかな第一歩ではありますが、会員の皆様のご協力を頂けます事をお願い致します。

【資料=理事会配布資料】

【提案書】

平成23年11月10日

港区産業団体連合会理事並びに役員各位へ

「地域防災 強化事業 推進委員会(仮称=地防強化委)」
の設置について
一都市型中小企業集団の地域貢献と事業継続計画の確立-

設置趣旨

先の東日本大震災から8カ月が過ぎ、被災三県の復興も地元住民の期待に必ずしも添う物となっていないようですが、ようやく復興の予算処置も進み一日も早い復旧・復興を願うものであります。

しかし今回の大震災は被災三県に止まらず首都圏でも多くの教訓を残しています。私達は、今回の東日本大震災において発生した帰宅困難者対策、液状化等の問題の解決を求められています。

また、現在「東海、東南海、南海」の海域において予想されている東日本大震災型の連動型大震災と、とりわけ危惧されている首都圏直下型大震災について、私達は未だ有効な具体的対策を持ち合わせていないと言わなければなりません。

今回、東京都をはじめ港区でも条例整備が行われ首都圏直下型大震災の取り組みを強化しております。

趣旨ご賛同頂き「地域防災 強化事業 推進委員会(仮称=地防強化委)」を通して、我が産団連においても自らの事業継続と地域社会への貢献を通して地域行政とともに地域防災の成果をともに高めて行きたいと考えています。

活動要旨

- 1) 地域に密着した中小企業者の地域貢献とは如何に!
-地域貢献宣言 =CSR報告書
- 2) 首都圏並びに東海・東南海・南海等連動型大震災に如何に対処するのか!
-命・企業等の防衛・減災を如何にするのか =BCPの作成
- 3) 宣言=「地域貢献企業」
-産団連白書の作成

《「企業・地域・行政」の新たなトライアングルの構築》

☆☆☆

- 防災の視点より地域事業の再発掘
- 防災マップの作成=行政との連携強化
- 全都的データマップの作成

当面する事業

- 港区防災協定並びに関係法令等の整理・検討
- 産団連名簿の整理運用
地域防災資料の収集・整理
加盟会員のデータアップと防災マップ・リスク情報の整理運用
=地域防災協定の締結
- 「地域声掛け運動=周辺立地映像保存」
=地域貢献事業
=映像保存については、年度更新し災害時旧市街地資料として活用 =罹災証明発行支援

- ◎第一期 事業所半径100m
・防災支援=地域住民へのリスク情報の周知徹底
=一時休憩所の提供・仮設トイレ保管管理、
帰宅相談並びに災害弱者・学区支援等の協力 他
- ◎第二期 事業所半径500m
・防災支援=地域住民へのリスク情報の周知徹底
- ◎第三期 …… 以上